

■ 書 評 ■

実践 がんサバイバーシップ 患者の人生を共に考えるがん医療をめざして

日野原重明 ● 監修
山内英子, 松岡順治 ● 編

慶應義塾大学教授・がん看護学 小松浩子

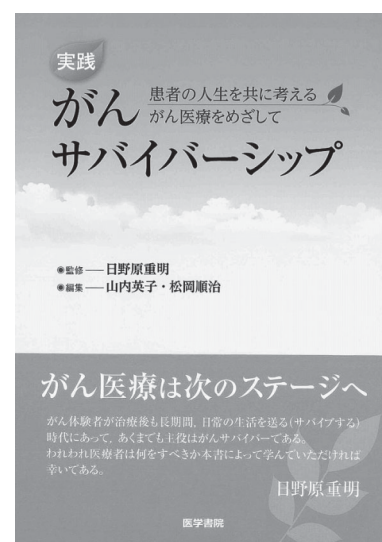
「がんサバイバーシップ」という言葉を日本語として理解するのは難しい。「がんサバイバーシップ」の考え方が生まれたのは、1990年代後半の米国である。私は、ちょうどその頃に、米国の Dana Farber Cancer Institute の関連機関でがんサバイバー（がん体験者）の方にインタビューする機会を得、「がんサバイバーシップ」について、彼の次のような言葉からようやくその意味を理解することができた。「がんになったことは自分にとって大きな衝撃であったが、がんになってからの全ての体験（苦痛や苦悩も含め）が自分にとって意味のある生き方や充実した日々の生活につながることを、医療者のみならず、周りの人々との関わりの中で感じられるようになった。そう思えるようになるには、自分のがんをよくわかること、医療者に遠慮せずに治療やケアについて相談し、社会に自分のがんをわかってもらうことが必要であった。」がんサバイバーシップは、がんの診断を受けてから、がんとともに生き続けていく過程が、その人にとって意味のある生き方や日常の充実した生活につながることをめざすものと

いえる。

本書は、「がんサバイバーシップ」の考え方を実際に実践や研究として実行している医療従事者、専門家によって書かれたものである。あるべき論ではなく、著者自身の卓越した実践力、それを支える研究文献や理論に基づく具体的実践が示されているのですぐに実践に活用できると思える。

最初の編の米国および日本における「がんサバイバーシップの歴史と発展」は必見である。がんサバイバーシップを理解するには、その概念の発展した背景を知ることが近道である。また、ケアの展開に必要なサバイバーの医学的リスク層、ケアモデルなどがわかりやすく解説されており、曖昧な概念であるがんサバイバーシップを理論的に理解する上で、大いに役立つ。

2編の「がんサバイバーシップの実践」では、がんサバイバーシップの4つの側面；身体的、精神的、社会的、スピリチュアル的側面から、がんサバイバーが直面する課題とそれに対する対応・対策がきめ細やかにわかりやすく解説されている。すぐにも活用したい。



3編の「各職種に求められるがんサバイバーへの関わり」では、がんサバイバーが体験する多様な状況を想定して、その状況で必要とされる医療従事者による専門的な実践が解説されている。実践の醍醐味がわかる。

最後に、「患者、家族とともに発展するサバイバーシップ」が記されている。この編があることで、はじめて本書は完結する。がんサバイバーの方々の内なる声を聴くことで、「がんサバイバーシップ」の本当の意味がわかる。そして、未来への道も指し示されている。

「がんサバイバーシップ」に対する医療やケアは、わが国では、まだ緒に就いたばかりである。本書は、わが国のがんサバイバーシップの発展に大きな原動力となるだろう。

A5・頁256 2014年
定価：本体3,500円＋税
[ISBN978-4-260-01939-2]

医学書院刊